

令和5年度 立正大学数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）自己点検・評価報告

令和6年4月

立正大学教育開発センター運営委員会

学内からの視点			
評価項目	評価基準	点検結果	評価結果（課題）
1.プログラムの履修・修得状況	本教育プログラムに対応する科目は全学部で履修することが可能であり、一部の学部では必修科目として卒業に必要な要件として設定している。プログラムの履修・修得状況については、対応する科目の単位修得状況を確認することによって把握する。	選択科目としている学部の中で履修を強く呼びかけている経済学部（25%）、法学部（24%）においては履修率が高かった。また、必修科目として実施している学部では、すべての1年生が本プログラムの対象となった。大学全体の履修者数は1,131人、履修率は10%となった。	全ての学部の学生が履修者となったが、学部によって履修者数、履修率には差がある。新年度のガイダンスなどの機会を通じてプログラムの内容や目的を学生に周知し履修者数、履修率を向上させた。
2.学修成果	本教育プログラムに対応する科目は全学部で履修することが可能であり、一部の学部では必修科目として卒業に必要な要件として設定しているため、学修成果は単位の修得状況や成績分布などを確認することによって把握できる。確認した結果を本教育プログラムの評価・改善に活用する。	本プログラムに取り組んだ学生の多くが単位を修得していることから、一定の学修成果を得られていることが確認できた。	学修成果を確認する体制の整備が十分に行われている。
3.学生アンケート等を通じた学生の理解度	全学で実施している「授業改善アンケート」の対応項目を分析することによって、授業内容の学生の理解度を把握し、本教育プログラムの評価・改善に活用する。また、授業内で担当教員が学生からのコメントや質問を毎回集めており、学生の授業内容の理解度の確認に利用している。	「授業改善アンケート」の実施結果をもとに、教育開発センター運営委員会で学生の理解度を確認し、今後のプログラムの改善・整備に役立てている。	授業内容の見直しにより理解度の向上に向けた取り組みを進めている。
4.学生アンケート等を通じた後輩等の学生への推奨度	本教育プログラムに対応する科目は全学部で履修することが可能であり、一部の学部では必修科目として卒業に必要な要件として設定している。単位修得状況や「授業改善アンケート」の対応項目の分析、授業時に学生から提出されるコメントや質問へのフィードバックを通して、本学部学生に必要な知識・技能の修得をサポートする。	「授業改善アンケート」の結果は授業担当教員が把握するとともに、教育開発センター運営委員会においても確認している。	授業時の受講生からのコメントは概ね好評である。引き続き受講生の興味関心を引き出せるよう授業担当教員と連携を図る。
5.全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	プログラムを構成する授業科目は、データサイエンス学部において必修科目となっている。経済学部や法学部においては1年次に履修を推奨する科目としてほぼ全員に受講させている。これら学部では履修者数は入学者数とほぼ同数となり、履修率はほぼ100%となる。その他の学部においても今後の単位修得状況や学生からのフィードバック、社会の要請などを考慮し、学部カリキュラムにおける位置付けを検討する。特に必修科目となっていない学部においては、新年度のガイダンスの際に「リテラシーレベル」対応科目を周知し、知識やスキルが社会で求められている現状について説明し履修率向上を目指している。	初年度の履修率の実績が10%となったため、継続して10%を確保できるよう計画を定めた。今後も新年度ガイダンス等での周知を進めたい。	教育開発センター運営委員会において情報共有を図るとともに、新年度ガイダンス等での案内の作成や配付により学内に周知し計画を達成したい。
学外からの視点			
評価項目	評価基準	点検結果	評価結果（課題）
6.教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本教育プログラムは令和5年度の新入生を対象として開始されたため、修了者は令和8年度に卒業を迎える。卒業生の進路、活躍状況、企業等の評価については、本学部において必要な情報を把握するとともに、卒業生や企業への聞き取りなどを通して把握する予定である。	卒業生の進路、活躍状況、企業等の評価については、令和8年度卒業生の情報を用いて点検する。	教育プログラム修了者の状況を把握する体制を構築していることを確認している。
7.産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本学の学生のインターンシップの受け入れ先となっている企業や団体からのフィードバックを参考とするなど、産業界等からの視点を本教育プログラムに反映させていきたい。	プログラム初年度のため、十分な産業界からのフィードバックを得ていない。本学の連携先の企業等からはデータサイエンスの知識・スキルを有する学生に関心があるとの意見がある。	産業界からの視点を含め状況を把握する仕組みを検討する。
8.数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	実社会のどのような場面にデータサイエンスやAIが活用されているのか、本教育プログラムの対象となっている科目において、事例の紹介を通じ学生の興味関心を高め、「学ぶ楽しさ」や「学ぶことの意義」を学生が早い段階から理解、それぞれの専門分野における学びと相乗効果を得られるよう配慮する。	「授業改善アンケート」の実施結果や授業時に学生から集めるコメントなどを参考に、授業担当者が改善に取り組んでいる。	実データを用いた授業展開など学生の興味関心を高める工夫がみられる。引き続き授業担当教員の主体的な取り組みを支援する。
9.内容・水準を維持・向上しつつ、「分かりやすい」授業とすること	本教育プログラムに対応する科目は全学部で履修することが可能であり、一部の学部では必修科目として卒業に必要な要件として設定している。単位修得状況や「授業改善アンケート」の対応項目の分析を通して、本学学生に必要な知識・技能の修得をサポートする。また、「自己点検・評価」の結果を授業担当教員とも共有し、授業改善に役立てることができる体制を整えている。	「授業改善アンケート」の実施結果をもとに、教育開発センター運営委員会で学生の理解度を確認し、今後のプログラムの改善・整備に役立てている。教育開発センター運営委員会と授業担当教員との情報共有によって授業内容を見直し適切な水準を維持しながら改善を進めている。	教育開発センター運営委員会と授業担当教員との情報共有を進める体制が確保されている。